

<コラム 発信箱> 戦火生き抜く強さ

大治朋子 (エルサレム支局)

毎日新聞 2014年7月29日

(太字は引用者による)

極限の状態に置かれた時、人間の本质は見えるものだと思う。

8日に本格化したイスラエルとパレスチナ自治区ガザ地区を拠点とするイスラム原理主義組織ハマスの戦い。11日余りの滞在を経ていったん出域する際、イスラエル側に出る検問所前で数百人のガザ市民に出くわした。ヨルダンなど近隣国の市民権を持ち、戦火を逃れて一時的に退避しようという人々だ。他に10人弱の外国人記者もいて、やはりイスラエル側に戻ろうとしていた。

検問所の分厚いコンクリートの門は、20～30人入るたびに閉まる。セキュリティーの観点から、一度に多くを入れないようにしているのだ。

市民は整然と並んでいた。それを無視したのは記者たちだった。後から到着したのに当然のように入り口前に集まった。しかもほぼ全員が、防弾チョッキを着た重装備である。

ガザの人々はそんな記者たちを見てもとがめることはなかった。近くには何度か大きな着弾があり、火薬の臭いが漂っていた。

爆音がすると、私は反射的に防護服の身をかがめた。異常に口が渴き、水をかぶ飲みした。近くで爆撃があるたびに大声で泣く子供がいたが、親たちは黙って抱き上げた。誰も言葉を発しない。ただゲートが開くのを待ち焦がれているのが、その沈黙の深さで分かった。

待つこと70分。市民の列の最後尾にいた子供連れの若い夫婦が私に「お先にどうぞ」と譲ってくれた。「防護服を着ているから」と促すと、サンキューと言ってほほ笑んだ。過酷な日常を生き抜く人々。その強さに触れるたび、自分もほんの少し強くなれるような気がする。